寿月集

尾上柴舟著

素月集

東京
雄山閣版

精進湖の富士

目次

昭和五年

昭和六年

昭和七年

昭和八年

昭和九年

昭和十年

昭和五年

（九月以後）

山雨

日光にて連日大雨に逢ふ講演會席上

大谷川高瀬の音にまぎれつつわがいふ聲のわれに反らぬ

東照宮にて

廊に滿つ雨のしぶきに濡れ濡れて流るる如し
緋い朱の色

社務所にて

瀧のごと落ちくる雨に目の前の大杉の枝もう
ち撓みたる

大阪にて我が気管の様をフイルムにをさむ強度の電球と扇風機の音とともに強し

せき立つる音に光に逐はれつつ筆こそ走れおのづからとく

銀閣寺にて

しかすがに人には怖れ池の龜岸にぞのぼる見まはしつつも

寂光院にて

夏の日もここにはかげり山水の岩潜ふ音もこもらひ聞こゆ

[illegible]院にて

山の寺院のかなたの月黄なりちまたは夜も塵静まらず

前橋にて

蒸しあつきあしたの霧の正午(ひる)も晴れず赤城の
裾の青く煙らふ

今日もまた裾野ばかりぞ霧に浮く赤城高嶺は
遂に見えぬか

水上温泉にて

谷深き利根の早瀬を山松の梢をかけて我見おろすも

橋下の闇を眞菰に照らしつつゆらぎつつ落つ花火の玉は

谷川溫泉にて

晝深み光しづめる山の湯に浸せば身こそいとほしまるれ

雜木山吹きわけて來る風さきに湯を出でし身を立たせたるかな

寄り來てはことほぐ人にこたへつつ共せざる
ことをまたも云ひつる

再はわが一代にし照らざらむかがやけき夜の
ともしびの色

このあつき人の情のあらはれにあたるべから
ずわがなしし事

過ぎし日をかへりみすればあはれわれあられ
むもいかかかる席に

身におはずつぎつぎおこる讃詞こたへむ語おもへども得ず

湧きおこる拍手の中のおもほてり云ふべきことを云ひ淀みつつ

15

云ひ終へて椅子にかへれば人人の顔のはじめ
て明らかに見ゆ

昭和六年

房總一周

成田にて

宵ながら床にわが入る心やすさ旅にしあれば
する事をなみ

小湊にて舟にて灣内の鯛を見る

かしこまで堪へむとおもふ醉ごこち島は近きを舟はかどらず

集ひ來る鯛のかしらのほの赤さ風にしき立つ波のひまより

緩やかに食みてしづかに沈みつつこの浦の鯛
は餌を貪らず

次次に舟離れゆく鯛の色久しうてなほ波にま
ぎれず

清澄山にて

根際（ねぎは）より幹を傳ひて大杉の梢（うれ）にやうやく目は
及びたり

谷八谷かけて照る日にかげしつつ沖より來る
切れ切れの雲

小松原鏡忍寺にて

大寺の暮るる軒端の高きより一筋くだる太き
雨垂

雨に立つ心くらさや枝張りて闇をとく持つ大
槇の下に

鴨川附近にて

車また濱をや走る夜の雨の暗きに動く一すぢの白

小松山

歌碑の石を選ぶに伴はれて前田荻生細井の諸君と常盤の繼瀬の山中にいたる　大石露出せり

小松山すべりつまづき繞り來しかひありて見る石のおもしろ

松かげにまろく黙せる石なれど云ひは知られ
ぬ親しみ湧くも

探し得し石のみならずこれぞこの戀瀨といふ
もおもしろき名ぞ

27

伊東にて夜夜月よきに逢ふ

湯を出でし頬にこそあたれ花も明日咲くかと思ふ月の夜の風

うつすらと月を籠めつつ春もはや半めきたる雲の動きや

流れつつ月にひかれる雲の下に遠笠山の尾の
靡きたる

月うけて矢筈の峰の際立つや更けて夜を湧く
雲のまなかに

29

堰塞越えてにはかに白き瀬の水に雲を出でたる月ただにさす

動けるは漁にか行く月のさす町のはてなる舟のともし火

熱海

梅園にて

崖に添ふ雑木のひまを白めつつ渓の梅こそ今
さかりなれ

31

溪に行く畦の細路うす甘き梅いにほひの傳はり來たる

春さむき響を水は立つれども盛り靜けし梅の林は

梅の花咲き滿つ下に首あげて啼かむとしつつ
足張れり鶴は

坪内逍遙博士の双柿舍にて

梅つつじ木瓜さへ匂ふ園の中に冬をとどむる
二本の柿

二もとの柿の木の間に見ゆる海うすく霞みて
春晴れにけり

露木に宿れる夜川合玉堂君地方俚謠をうたふ「月の出頃と約束したが月は山端に身はここに」といふあり歌に擬し見る

山の端にいさよふ月を知らざらむ鈍(おそ)やわが背
子とく出でて來ね

夕闇にまぎれまぎれてとく來つつ底の心を月に見られつ

飛行機戰闘

朝空の雲のひまより鳥のごと敵機つぎつぎあらはれ來る

矢いごとく光を截りて飛行機の單縱陣はいま
わが上に

捲き起りにはかにすすむ土煙わが戰鬪機たら
むとする

白白と舞ひ落ちつつも爆弾の煙ぞ融くる空の
みどりに
かたかたと止まず響けど高射砲尾を引かぬ音
の寂しくもあるか

隼のままいこころになりぬらむ逃ぐる機を追ふ機上の人は

見るが中に白くひろごるパラシュート水母と浮けば大空は海

大空を横さにまろびまろぶ機を今はこころを
安んじて見る

いくさはてしみ空の末に目をやりてはじめて
富士を見出しにけり

伊東歌碑除幕式の日

四月十一日、伊東の町に、わがために歌碑の除幕式行はる席上

この上もなしとし思ふ讃詞受くべからざる身の受けをるも

續き來て身にはかなはぬ嘆詞一ことごとにう
なだれしむる

拙かろ文字はた歌よ後の世に殘すべからぬも
の殘したり

あまりにも事なくわれの書きしかな後に殘らむものと知る知る

いささかの誇らひ心と見からう見すればするまま消たれて行くも

寄り來てはことほぐ人にしみじみと身のさち
を妻も感じ居るらし

ともすれば語淀みつよろこびと恥とまじらふ
みだれ心ちに

幕に吹く風もあらねば會場にわが低聲も通れ
るらしき

報ゆべきすべをも知らず受けてある人の情の
あつきに堪へず

45

よき春に生きてわが居てたぐひなき人の情に
逢ひけるものか

箱根

小湧谷にて

花も葉もうすくれなゐに煙らせて朝日今さす
谷のさくらに

藍ふかき膚(はだ)の靜けさ咲き滿てるさくらが上の
日に背く山

明石に近く火に逢ふ

枯れし野の草より草に飛び移り火尖が來る野
火の火尖が

ためらはずわが運轉手ましくらに車入れたり
炎の中に

おこしゆく車の風しつゝからしこの一瞬の火
のくづれにも

ふみにじり敵陣過ぎし土の如く緩く今行く火
出でし車

那須野

白白と嵐のなかに光りをりゆふべの山の肩に
ある雪

夕容は眞青に晴れて風おこす峯のとがりのす
るどきさびしさ

吹きしきり雲はとどめぬ風晴にさやかなるか
な夕那須嶽は

うなり来る山のあらしにうち揉まれあはれ躑
躅の枝磨するも

吹きわくる風につつじの花狂ひ光ちらつく夕
野の道は

音くらくわたる嵐に夕野路ここだ躑躅は花を
こぼすも

呻きつつ夕野の躑躅花飛ばすあらしの中を面
伏せて行く

うち亂れ夕くれなゐも紫も風尖にして躑躅は
散るも

はてもなく渡る嵐に木も草も狂ふ大野のうへ
の夕月

颯に澄む月の下びに黒くひく五つの峯のつよき脚線

白樂なる石井氏別墅にて

夕容のくらきなかより浮ぶ月いま高窓の人に近づく

夕青き苑の廣芝生の灯の及ばねところ月の照らせる

導きてしばしとどまる提灯に林の花の見えさだまりぬ

晝頃にて

快く今しわが目は閉ぢむとす疲れ來し夜の水
音の中に

誰の樹のおとす葉の音と輪とたまたまにして
青き潮淵

湯ざめする身をばいたはり雨しぶく溪の川瀨
は玻璃越しに見つ

岩かげを宿の浴衣の人出でて行きぬ行かるる
瀨のなかばまで

昇り得てうれしき人かまだ知らぬわれに手擧げぬ岩の上より

再び那須にて

連なれる峯におのおの雲ありて梅雨近き野はくらし斑に

なだらかに峯の雲よりあらはれて下る斜面の

線は長しも

病みつつも心やすらに君ありとおもふ思はな
ほ確かなり

君生れしこの町にして君亡しと聞くこの縁は
何の縁ぞも

語らはば慰ならむと君がまだ知らぬところも
見て歩きつる

殘るてふ逝くてふ語に留められ別れらるべき
君とわれかは

語らむと島を入江をよく見つつ思へばすでに
君亡かりけり

君とまた同じところに生れずば語るべからじ
この悔心

國とほく求め極めしそのままを火にやしつらむあたらまなびを

友人某氏の狂死にあひて

かへり見てふとぞ悸くかかる死にわれもせざらむものならなくに

北海道行

海豚

津輕海峽にて海豚の大群を見る始め舟を追ひて來り漸次多さを加へて舟にときたたむとす

身を揉みて舟追ひ來らし海豚らの頭（かしら）つぎつぎ
波間より見ゆ

競ひつつ走る海豚に朝海のうしほ一筋黒みつづくも

あせり立つおのが力にあまされて海豚は躍る青波の上に

乘り越えむ躍り越えむいあらそひに海豚海豚
の背と背と打つも

波裂けてしばしまさをき朝じほに海豚い腹の
くきやかに見ゆ

日の下の波の裂目にあらはれてあな大海豚舟
抜かむとす

いささかの凄みをもてど狐の子かはゆく小さき眼をかがやかす

狐てふことを忘れて狗の子に出し馴れたる手を伸べにけり

我行けば行くがまにまに傳ひつつ隔の綱を狐
めぐるも

駒ヶ岳

めざしゆく峰のはるけさいただきの一つ巖(いはほ)は
いまだ小(ちひ)さし

はてもなき谷の小竹原一筋のみだれぞ見ゆる

熊行きぬらし

見下せば黒松林くろぐろと向伏す空の雲につ

づける

仰ぎ来し瀧の上かも日の下の花野の中を水行く音す

かたぶきて外輪山にかかる陽の光に青む深谷の雪

毒の湯の煙る火口をめざしつつ峰の雪なほなだれむとする

下りむとしまづ衝き立つる山杖に堅くもあたる雪溪の雪

影もなき大雪原に杖立ててしみじみと仰ぐ空の青さを

山の杖先づさしおろしもそろもそろ雪の大河
わが足入れつ

陽に光る原始の雪の目を射れば眩（くら）みごこちに
下（お）り立つ谷間

荒山の千年古雪ふみしむる草鞋の底にこたへて堅し

吹かれつつあらしの玄玄に氷りたらむ雪の大河波は動かず

立つ波の片面ばかりにさせる陽に影多くもつ
雪の大河

餌に急ぎ熊のわたると人や見む雪の大河越え
行く我を

われ載せて流れ去るかとふと思ふ大雪河の音
立てぬ波

啼兎

大雪山に[illegible]めり啼くが故に啼兎といふ性怯なれば岩間より出づることは極めて稀なり同伴の村田博士とともに始めてその聲を聞き且つ望遠鏡にてその貌を仔細に見る

花草のにほふ岩間のここに啼きかしこに聲す多きぞ兎

動きつつグラスにうつる薄鼠兎岩間に身をい
だしたり

と見かう見あらずと人を定めけむ兎すばやく
岩にのぼりぬ

傾きて雫ある緋に近づける陽に手をあげぬ小
さきものは

果もなき大山原に點を置くこの存在いいとし
くもあるか

眺め入る人をば知らで寂しろき谷間を覓見据ゑたりけり

風絶えて雲も來らぬ山なれば電の空は安らかに見ゆ

登別

登別温泉の湯を出づるところを地獄谷といふ黒煙の洶湧奔騰凄惨の状久しく見るべからず

くぼみなば湯もや湧かむとやはらかき硫黄い

山を足抜きてふむ

ふむ足の傍より上る白煙あやふき道をわが行くものか

山風に吹き伏せられて廣ごれる湯氣の底よりたぎる湯の音

崩え崩えてつひに落つべき峯の岩湧き上る湯氣の上に幷べる

湧き狂ふ湯釜に添へる道見ればかかる處も人行きにけり

樽前山近く

北の空晴れてはてなし樽前の煙ひとすぢ直上りする

青深きみ空を衝きて樽前の煙ぞ上るあとよりあとより

峰前のなだりの末を黄にほかしあな女郎花咲
き續きたる

女郎花黄を亂す風の吹き通る野は牛かひも牛
もあらざり

昔ながら立つ汐霧かも輪西の海水平線もわかずを暗し

寂しきはここの海面波といふ波はあがらぬ静けさながら

海に添ひて夕照り暑き石の道よろめきつつも
行くはあいぬか

白老村にて。

近づけば恥おみゆかしみあいぬの子小屋の戸
口を出つ入りつする

圓き眼によろこび見せてあいぬの子戸に入る
我に取りつきにけり

[illegible]

小屋隅のきらきらとしたる片明り金の蒔繪の行
器よりする

入墨の青き口許美しき笑みをたたへて人われを待つ

熊とると山の峡間の二十里を雪にふむとふあいぬ健夫は

怒れるを抱きて刺すとふ熊よりも太き膽をし
あいぬは持てる

神祭る窓より入りて日はさしぬまろうどらに
と敷ける筵に

草の花あかるき庭に熊のくびかけたる棚は影
ひきにけり

あいぬの子手さし入るればじやれつきてわざ
ところがる檻の熊の子

立ちあがり檻の格子に手をかけて熊は見おくる見かへる我を

海に添ふ草丘

釜山市外に添ふ草丘の上につづける草山を「とつかりしよ」
といふ牛馬放牧せらるる多し

車捨ててすべらふ草に輕き靴すりつつ上る岡
いまろみを

みどりよりみどりにつづく草山のかひに黑き
は親牛子牛

見おろせば大き鼎の沸くごとし風にしき立つ
北海の波

崕下に押しつめられて立てる波風にさからひ
今折れかへる

寂しとや一つ親牛風來たる海に向ひて長鳴き
にけり

うちつづき子馬親馬のぼり來る岡のかなたは
牧なるらしも

夕映の小草の岡にあふはれて躍る子馬の足の
か細さ

子馬らは樂しかろらし夕ばえの岡にかけのぼり戯れ下る

海の風荒さに堪へで子馬らは岡のとかげに片寄りゆくも

凪の海なほ見る我をいぶかしみ子馬顔いだす

岡のかげより

火口より火口を傳ふ雲のかげ陥りのぼり陥りのぼる

静やかに火口ぞ並ぶ照らす日におなじ色もち影ふちながら

煙吐かでここに幾年たまりたる火口の水に鈍き日さすも

つらなれる火口の縁の小火口かはゆき口を開けるものか

草いきさか土を色ぞるく赭り道閘の穴口を見下し通る

埋られて夏草長き底見れば大き穴口の侮らはしき

ここに寝て破船の人は安からむものの柔らかに
つづく砂原

玫瑰を妻に教へてふむ砂に北の海邊は足裏い
たし

111

黄に靡くあだい大野の草ふみて向ふレンズも寒き夕べや

あさもよし紀人となりぬ眞土山大和へ越すと夕べのぼれば

昭和七年

歳旦

昨日とし異ならぬこと今日もして今年われまた生くべかるらし

いささかは足音(あのと)を立てて一すぢのわが道を今
年踏みつづけきまし

大いなる願は持たねかただ今年心貧しくあらで
過ぎばや

117

新しき日月のもとにわが心足らふに近き生き
やうをせむ

伊東にて庭を作らせつつ

移されて芝生に影を今日おとす老木の梅に幾
世見るべき

今日立つる岩に水つき苔むひてもいさぶるまでわが老いざらむ

作り終へて庭師歸れば岩は岩木は木のところ皆得たりけり

東伊豆

天城山を越えつつ

雲切れし杉の林の上の空見上げて月の出づるを待つも

運轉手車輪をかふるひまに見る動くともせぬ
峰の上の月

今井の濱に向ひつつ

鶯の啼く春山を朝越えて竹のしづくにしとど
に濡れつ

今井の濱なる[illegible]にて

花おほき椿の枝にほとばしる春の霰は音たしだしに

八幡野より伊東に向ひつつ

次ぎ次ぎに入り來る茅原椿原ヘッドライトのつくるまろみに

雲はみな沖べはるかにただなはり月一つ行く
大海の上を

山清水

伊東の別墅の庭に水ひけと懇なる人のあるままに山より長き樋をかけてわたす

道遠み來ずと定めし山清水おもひもかけずてこに流れつ

今掘りし岩をくぐりて山清水流れ馴れたる音立つるなり

巻葉もまだ新しき竹の樋の口に滿ち落つる山水あはれ

深き夜を起きてわが見る遣水にありあけの月
はさせり斜に

しみじみと清水の音を聞いてゐるこの淺春の
夜のねざめかな

あや織りて白き小石のうへわたる水に従ふ紅梅の蕾

出雲の千家氏の令妹の長逝せられしに

年古りし社おもへばその前の日傘の君がまつは見えしを

桃畑

西下の道すがら

群松の岡窓近く過ぎ去ればたちまち桃の畑目に滿ち來

影を地に短くおとし咲きさかる桃はみな陽に
匂ひ渡れる

桃(もも)畑(はた)の中の一つ家戸を出でて心かろげに人こ
なた見る

風絶えて陽は一ぱいの桃ばたけ佇む人の眩し
げなりや

岬町の講演會場にて

ところどころうなづく人のある如しわが説く
ことも徒(いたづら)ならじ

[illegible]

自づから湧きことばも出でて來ば親しみ永き
願ひ述べば

戯言(たはごと)と人は聞かめどわが云ふはただ一つなる
われのまことぞ

御芝生

觀櫻御會に召されて

咲き滿てる八重花櫻あざやかに照らす芝生を

君みゆきます

御列は櫻がもとにかかりたり今大君の見上げ
ますかも

あなかしこ殿の御手擧げ大君はわれらが方に
向かせたまへり

母の死

母京都なる親戚の家に一にはかに歿す特急車にて赴く

信じ得ぬ心を遠く載せて來て取れば母の手冷
えはててをり

やすらかに寝入れる様に見えながら昨日の人

となれる母はも

聞き馴れし高きいびきの今もまた響けと母の

顔見て居るも

枕上泣く聲聲をいぶかしみ目ざとき母のなど
て醒めぬか

著莪の花あかるき谷の堂近みともり連なる蠟の火らすき

僧正ケ谷への道すがら。牛若を思ふ

我のごと木の根岩角ふみなづみかの若人も此處を行きけむ

失せがたき一つ鏡心ゆふべゆふべ經擲ちて人は來にけむ

貴船に下りつつ

幾めぐり下りゆく山路谷底の朱の鳥居の見えて久しき

瀧の都

岩の間にたぎつ早瀬をおもしろみ三たび見に
來つこの山川を

雨晴れし空の朝東風（あさこち）早からし三船の山に今日
は雲ゐず

筏士は川原にちさく憩ひをり釣橋の上ゆわが
見おろせば

板間よりたぎつ早瀬の波見つつわたる釣橋揺れ定まらぬ

岩床に繁(し)み立つ小松これのみぞかのいにしへの人は見ざりし

慶島にて

いささかの風もさそはで蒸暑き夜をひたひた
と岸を打つ潮

宮島にて

大前のともしのひかりほのぼのとさせる廊ふ
み夜の宮行くも

龍野にて

鶏籠の山の曇れば古き町古きいらかの上を雨行く

淡路より播磨をのぞむ

一抹の陸にならびて横雲は入道雲のまへにたなびく

松陰に襟をひらけば海越えて播磨より來る風

汗を吹く

橋立

切戸にて

影重き寺の木立は動かねど家の入江は波揚げてをり

珍らしく心澄むよと云ひて立つ切戸の寺の夕かげの中

夕ぐれの切戸を通る汐に乗る舟花やかに火をともしたり

暮れてなほあかるき汐に群れ乗りてこころよく行く魚はさよりか

[illegible]つ

薄雲に出で入る月をすかし見る群松の枝のしげり深しも

月さびぬ松の下かげふつくりとふまるるもい
は積める落葉か

並び立つ洲崎高松月のゐる中空にして枝かは
したり

群松の枝のまじはりひまあれや行く手斑に月さしてあり

[illegible]山にて

群松のみどりに添ひて一線の砂洲を過ぐる鷗の多さ

煙幕のさ中にむかひ募らに衝き入る人のちらちらと見ゆる

煙裂きて光さ青く飛び散れり事遂げしかも三人の勇士

煙濃きなかに湧き上る強き烽破れにけらし鐵條網に

煙ややや消ゆるところに現はれて劍態をなす逆襲ならし

鵜飼

長良川にて

夕雨にひかる堤の石ふみて危く舟にわが下り立つも

音もなく流るる水に乗る舟の提燈の火はさせりとほしく

夜の靄に火こそはうつれこの川の曲れるところ鵜舟ゐるかも

風帶びて靄は山より流るらし舟の篝の片靡き
する

鵜舟いまくだりそめたり篝火と舷(ふなばた)を打つ音と
近づく

うち競ひくぐり入る鵜の爭ひに夜の川瀬の水湧き立つも

篝火にひかる鵜ゆたかにも翼の伸せり魚得たる鵜は

亂れあふ鵜繩ふたさず鵜飼人靜かに立てり夜の淀に

鵜飼舟歸りつくせば夜の霧のうするる處月出でにけり

御苑

新宿御苑の觀菊御會に召されて

大行幸今と待ちつつやや久し池にをりをり風
吹きて過ぐ

行幸待つ御苑の芝にいささかの黒みを點ずた
んぽぽの葉は

丈高きあめりか婦人骨(こち)なげにのぞく御幕の中
の嵯峨菊

うち煙る御苑の芝に伸びてけりひまらや杉の
黒きクかげ

名古屋市の病院に[illegible]君来たる

人の呼ぶ聲に氣づきて遷り疲れ倒れむとする
身を廻らしつ

忙がしき仕事のひまを盗すみつつ語れば嬉し

緑のぬくみも

昭和八年

板橋

板橋より戸田へ

紅葉せる木かげの家の村めきてアスハルト道

ここに盡きたり

戸田附近の道は著しく廣く長し

遠山はほのかに靑し坦坦とこの大道は續くどこまで

戸田橋まだ開通せずして、わたしも渡舟を行く

枯芝の焦茶の上にあとつけて貨物自動車埼玉ゆ來る

放水路曲りしるしも赤羽のふたつ鐵橋一筋に見ゆ

志付

列ね吊るはたけの大根日を經しか下なるが端はたに凋けり

三寶寺池

敷蘆の折るる音高し池中の泥ふかき道をわがふむままに

水の上に風の來りてつくる波底の冬藻にいまだ及ばず

冬に澄む水は動かず聲立ててついついと二つ
鴨は行けども

[illegible]

冬ふかき光保ちてたぶたぶと石神井川の水は
流るる

城あとの園の芝生に流れ来ぬプールより立つ
夕ぐれの霧

御宴

なにがしのある宮邸にて御宴の日

「暫く」とわれにのらする御ことばに身をかたくして額づきまつる

御紋もの鐘のツオーク鳴らさじと思ふすなは
ち音高くしつ

聞こえ上ぐる人のことばの安けさを羨みにつ
つただに畏む

聞こえあぐるわれい語に御ことばのいかに響
くとかしこみて待つ

あたたかに光ぞあたる傾きて黄ばみつづける
宮の芝生に

まろやかに冬を築れる庭の樹に鳥啼くらむも
ここに聞こえぬ

梅

仕來たる別墅の梅枯れたれば家陀師して代々もとめさするに近き山かげにありといふ共に行きて購ひて掘りもて運ばす大き樹なれば朝より夕べまでかかりて辛うじて庭に入れて植う

初山を祭るしるしの笹竹の四手も動かぬ朝日和かな

枝の間に檜山の緑見せつつも椎は立つなり谷の日向に

掘られても木は執着を地にもつや仆れむとして猶立てりけり

輕輕と曳き出ださるる荷車の梅は蕾を絕えず
こぼすも

張り切れる枝ことごとくふるはして梅は網に
し立ち直りたり

綱引けば心のまゝに廻されて梅は木長(きだけ)こなた
に見する

苔づける巖(いは)一つを根に置けばところ得がほに
梅のなりぬる

ひきよせて匂かぐ日も遠からじ蕾ある枝の窓
に届ける

おしこむる朧の中に故郷の町のあかりはあま
た近づく

法要の日

祖母に鳴り父に鳴りたる寺の鐘母の葬の今日
しまた鳴る

老いぬるは失するを早み今日集ふ顔は大方若くしありけり

古き堂古き疊のそこ冷(べえ)の膝にのぼりて讀經は長し

あきらめは悲しきものぞ亡き親を語れど今は
涙出でざり

亡父のと並べて亡母の骨を埋む

ありぬべきところにありて今日よりは母の心
も落居ますらむ

萩野原といふ村の叔母の家にて

山かげは土の濕り深ければ燃えざる香も寂しまれつつ

雨少し降る晴るるがままに山を下りつつ

目の前の川に今立つ虹の輪を拾ひて視線は野を越えにけり

時雨せし田の面しらじら霽立てど虹は末まで
明らかに見ゆ

幅廣く立てる虹より透きて見ゆあかねさした
る夕草山は

共に出でて竹の葉かげもふまむものかかる月
夜を見居るならば

二人して雪掃ひせし日を遠み影の少なく竹も
なりぬる

ぬかるみを避けてわがふむ堅雪に檜原のかげ
は行き難(がて)ぬかも

入るままに谷はいよいよ迫り來て水こそたぎ
て灘近からむ

いく度かあらしは過ぎし檜の枯葉谷のとかげ
の雪黒ませり

川沿に路のめぐれば崕の間(ま)に瀧の半面(かたおも)見えて
かくれつ

山とよむ音は忘れて岩離れなだるる水を見て
立てりけり

春淺き山の午後の日さすままに瀧の落口黄に
匂ふなり

伊勢山なる大江氏の別墅にやどる大門の亭を過ぎて伊賀の山までも見は

打ちむかふ心ひろしも朝雲の流るゝ末も遠き

國原

奈良あたり

浮消澤のほとりにて

花白き馬醉木二本寂さむき大野の雨に濡れながらなる

三笠より南へ動く雲今し靡きかかれり高圓の
らへに

春日の社に近く

鹿も來ぬ林の梢白めつつふつさりとして咲け
り馬醉木は

191

襟さむう雫とともに花落ちぬ雨の馬醉木の林
を行けば

大津のほとりにて

行けどなほ行きつくされぬ大橋の半に仰ぐ淺
春の月

そよぎ立つ岸邊の藪のひま白ら川波見ゆる月の明るさ

法師

月夜野の[illegible]衛門地蔵堂より俯瞰すれば刑場の跡眼下にあり

今日の日の如く心のはればれと仕置の臺に人上りけむ

法師に向ひて自動車を馳す

風ありや色まだ浅き桑畑の中の水田に波光る
見ゆ

[illegible]

薄紅の一重ざくらに咲きまじり濃染の梅の花
ぞさやけき

笹の湯にて

溪(たに)に添ふ竹にまじりて山櫻水の反射の陽にかがよへる

さし淀みひかげ煙らふ深谷の底に村ありや梅咲ける見ゆ

梅さやに白きを見せつ山の雲下り來て包む湯
屋の軒端に

峰つたふ雲の斷ゆれば山の峽狹きみ空の晴れ
にけるかな

川治

鬼怒川の奥なる川治温泉は川治の岩床より湯を湧くにたたへ
下谷川に注つ

滑らかに岸の岩床湧き越えて光をこぼす湯ぞ
ゆたかなる

いはむろの際は何處ぞ闇きより湧く湯の底に
眞陽はさしたり

天つ陽の底まで照らふ湯に浸りじつとしてゐる子い膚のよさ

浸りつつ岩魚(いはな)を釣ると竹の竿川にさし出でぬ
子は湯舟より

釣り上げし魚はやまめと喜びて手を叩く子に
湯は動くなり

いはむろの奥一處あきらかに反射ぞ動く湯の
湧くままに

岩にさす反射の光移れども湧く湯うれしみ猶
ひたりをり

林を行きつつ

名を知らば知らでもさてはありぬべし道しろたへに散りしける花

中島徳蔵先生の七十の賀に

今も猶若き力に満ちませば老の境は君を入れざり

茜

透きとほる白さの底の薄茜指（および）の爪のこのごろ
めでたき

サイレンの近近と響く窓の戶に濁れる空氣波
うち寄する

汗ばめる午後の額(ひたい)のむづがゆさまた新しき惱
を感ず

理性乏しくなりぬとなけれ青の空うつろ心に
しばしば仰ぐ

夕まけて風静なれば若葉みな疲れし後のほほ
ゑみをする

大き蛾を拂ひ出して皿の上のメロンの角度鋭きを見つ

身に保つ力のかぎりひきしめて怒を人に移さじとする

人よりも持てりと思ふあきらめも何ぞ我今憤ろしき

くすぶりて燃えもあがらぬ火の如き底の怒の止む日知らなく

いきどほり愁となりぬ露臺よりしみじみとし
て月に向へば

日の出でて日ののぼり切り日の落つるこの長
き間に笑ふは幾度

疑へば疑はしかる物にまじりいつしか我を疑ひてをり

すきやかに心に描くまぼろしも人と離れしわがはかなこと

わが顏も昨日のそれにあらざらむ物のすがた
の日に日に嶮し

物の相日に鋭きを見居ればかか心しきりにとが
るを覺ゆ

聲透りなくうぐひすに夕かげの徐ろに伸びて
庭くろみたり

中分けてわりなく過ぐる朝風になまめきてそ
よぐ若竹の葉は

驛の歩場

廣島にて

冷えしろき驛の歩場のうすじめり嬉しく雨の

あとをわが來つ

ほのぐらく濕れる道に光さし曉の街は人いま
だ行かず

元安川の岸に宿る

滿つ汐にさせる夕日の反射(てりかへし)家並白くテントを
おろせる

夜を深み滿ち滿つ汐に浮び來て滿月はあり高

樓の下に

住吉祭

目標の旗あるを中心に數艘の舟を作り舟をとりこぎ周りつつ上す

舷の一人若子は月光いつよきに競ひしげく櫓振る

漕ぎめぐり「ありやせこりやせ」と櫂操る子月の
下びに十四人なる

耳立てて聞けば樂の音歌聲と矢聲の中に透り
て響く

鳥羽にて

波の上に赤き浮輪を投げかはし少女ら遊ぶ海
を侮り

青みつつ底の眞砂の寄りて來るあしたの濱の
潮の親しさ

賢島にて

松おほき島の迫間に流れ入りて滿へ極まる夏の靑潮

吹き立つや午後のしほ風島島の松の梢のみな動くなり

大王崎燈臺に上る

あへぎごこちめまひごこちに堪へかねて目の下の海をしばらくは見ず

名古屋にて

知る人の多しと思ふ心強さ人ごみの町をゆたに歩むも

黑部谷

宇奈月溫泉

山近くある身と知りつこだまする花火の音の
おびただしさに

猿飛にて

高崕をくだりとまれば口の前に氷の山なして
水なだれ来る

淀み來し水はたちまち水ならず千曳圓岩越ゆる瞬時

狂ひ立ち早瀬の水は怒れどもこの深谷は風もおこらぬ

とんぼらは荒瀬の上を群れ飛べり馴れ極まれ

るもののいやさか

夕空

法師庵の縁にて雲を仰ぎし時に

哀れにも晴れたるかなや飛ぶものは飛びつくしたる夕暮の空

今もわが生きゐる不思議感じつつ年さかりゆく君を思ふも

君に見せ君に聞かせむ事あまたあるをめざめぬ君をいかにせむ

病みこやり瘦せは瘦すとも今日いまだ生きつづきゐる君にありせば

ある夜。

深深と澄みたる空に一つ浮き有明の月のたよりなげなる

昭和九年

寄る波の影に亂れて日のさせる底の平岩たえ
たえ青き

山かげのあしたの入江島を抱く滿ち來る汐の
音むせぶなり

なだれ来て崩れむとする岩のかげ綸だれてゐる人のちひささ

網下す舟こそ動け島山のかげのふかさに魚のどふかも

島山のあしたをぐらき洞の中に光を運ぶさざなみの群

岩間より陽やさしとほる島の洞底なる波のきらめき揚る

まじろかずみつめてあれば島も木もただここ
もとに寄るここちする

參內

取り出でて今日ぞと思へば稀に着るフロック
コート重たきもよし

かくのごと參う上らむと思ひつる心のままの
朝明けにけり

阪下の御門廣けど入り集ふ車にわぶる衛士も
うれしげ

東の御車寄にさせる日もすでに春なる大宮ど
ころ

白たへの御帖に添へる墨の香もめでたや今朝
の大殿の中

「聖上」の御札の前にぬかづきて書き上ぐる文
字の拙なき畏さ

書きあぐる臣のつぎつぎ断えせねば御筆もとまで墨ふくみたり

御階下りて仰ぎみすれば大宮の上の大空澄みて深しも

生れませる今日を思へば天地も民も心の異ならなくに

元日

まづ一日暮れて星みる大空のいづこにかいまだ紙鳶のうなりす

水聲

伊東の別墅の庭の導管を改めて絶えげなる遣水を豐かにす

寒き水梅のもとより分れよところに殊更われ
石を置く

岩越えてあした寒けき水の音清きねざめに妻

とし聞くも

音立てて木の實甚落つ細かなる動きを見する

遣水の上に

冬の庭何もなければ水飲みに來つる鳥待つ心になりぬ

塞の神の祭十と二子どもら隣に火を焚く

兒どもらがあぐる炎に催され天城おろしも來て火の粉吹く

群れ立ちて散るを防ぐと笹を振る兒どもらが
影火の前に浮く

曉のをぐらき山にこだまして祭の竹は火に裂
けつづく

雪

長岡にむかふ

ほの黒く聳つ雪の片ぎしに車の灯こそ乏しく
はさせ

車入る雪の谷かげにはかにも音するものは瀧か嵐か

なだれ來む雪の危さ思ふらむ語なきかな車中の人は

長岡にて

乗る機の操衣のひまより見ゆる雪ほのに赤きはネオンライトか

悠久山にて

やはらかうわがふむ足にこたへつつ春近き山の雪は散らざり

雪の上につづくあしあと履みあやまち松の上枝をわが握りたり

わが世界忽ちくらし目いさせる雪の山より眼をかへす時

上(のぼ)り切り斜面の上にスキー人今すべらむと身を立たせたり

半より吹雪を立ててスキー人斜面をごろぶころびて下る

笑ひつつ雪より立てるスキー人ころぶそれだに樂しかるらし

雪の斜面下るがままにスキー人腰くねらせりこれはころばじ

スキー人馳すれど散らぬ此の山の雪は水氣を
持ちたる如し

大御酒

御慶賀に參內して

御喜頒ち賜ふと銀瓶ゆ出でくる御酒を受けつつかしこむ

たぶたぶと賜はる御酒をみな受けぬ大御盃大
きなるまま

よろこびの心すすみに堪へずして大御盃飲み
干しにけり

酔ひ足りて豊明殿の大床をめまひごこちにふむが畏さ

酔出でて燃えむばかりの赤き頬も今日にしあれば人許すべし

水戸偕楽園にて

花持つか稍いささか白ませて梅は芝生の黄なるに立てる

小砂利ふむ杉の下道寒竹のそよぐを聞けばいまだ冬なり

歌碑披露式

生駒山歌碑披露式と講演大會とのために西下す沼津を過ぎて

咲き滿てる桃の花畑みちびきてわが牧水ぞ彼の日見せつる

今日のごと咲き匂ふ桃は丸丸と見めきし人の
顔照らしけり

[illegible]

今度はと思ひて力わが籠めし線のあまりに太
く品なき

力なほ盡きざる線のゆきどまりここは石工ぞ
彫り損じたる

滿ち足りてありと見らるるはづかしさ思に遠
き線を形を

四國行

午後深く內海霞む日ぐせなれや蒼茫として遠し屋島は

[illegible]にて

夕山のくらきが前に目のあたる櫻一木の花さやかなる

吉野川の鐵橋の長さ東洋一といふ

渡り終へてかへりみすれば長橋の半くもらし雨すでに來つ

鳴門

さきだちてふむが畏さいでましを待つと人ら
の今つくる道

落潮にいまか始まる青海の中に白白瀬の見え
そめつ

荒潮のおこすあらしい中に立ちこや裸島木だにも持たず

淡路より雨をはこびて荒潮に力加ふる颶帽飛ばす

荒れ狂ふ音は聞こえね大き渦巻くかと見えて
波廻らふも

落潮のかぎりにあれや湧きあがり狂ひ騒立つ
波ましろなり

雨けぶる岬より來る黒き點汽艀荒瀨を横切るらしき

青波をますぐに切りて來つる艀あはや傾き瀨に乘り入りつ

流されじ巻かれじものと荒潮と舟は爭ふ傾きながら

幾荒潮越えて傾立て直す舟に詰めたる呼吸吐きにけり

眞晝

伊東にて

妻とわがことばと絶えし眞晝間の障子の外の
遣水の音

さむざむと矢筈の岳に雲のゐて春の天城は今
日いまだ雪

たたなはる雲氣の雪に隙ありや遠笠山は黄に
晴れて見ゆ

町近き雑木の山に陽のはやく入れば高まる遣水の音

下婢梅逝く

眠るともなくて眠に入りつらむあまりに顔の表情のなき

雪晴

うちそろひ翼ひらかせ雪晴の空に方向換ふる
飛行機二十

枝の雪枝におとせば木木の芽はすなはち春の
陽に向ひたり

なにがしの宮の御召に

ほほゑみていますまにまに我ながら描きこと
を聞こえ上げつる

春の山の畫に

濕りたる新草の香のただよひて雨後の山に風
すこしあり

近畿を行きて

鞍馬山にて

何處まで上りゆくべき石段ぞ足裏すでに熱をもちたり

青萩の花うなづき止まず雨過ぎし今も猶繁き

杉の雫に

山の雨稍をぐらきあたりより明らかに見えて

またも落ち來る

寂光院にて

住みつかで幾夜夢見ずおはしけむこの山水の音の荒きに

建禮門院に奉仕せし阿波内侍の像は院の御作と傳ふ

古りながら生生と見ゆるまめやかさよき人もちて君おはしけり

口明ケ岳にて

朝雨のなごりの霧のただよふや正午（ひる）の潤水のうす緑なる

湊祭をみる

初夏の埃の中を祭の列みどりくれなゐゆるがして行く

奈良にて

春日野の藤の紫白けたり悔しく三日を遲れて
わが來し

夕づけて我來しからに若宮の舞殿の戸もすで
に閉ぢたる

吉野にて

さくら花壇にやどる家は深谷に臨めりその夕べ

霧の湧く谷の段畑立つ桐の梢ばかりが悲しく
黒き

287.

さやさやと鳴るはさこ川谷畑のくろめるが上に靄ひきにけり

向山如意輪堂の塔にまで谷の夕靄立ちとときたり

群れかへる鴉に何かまじりつつ鳴けるもののあり谷の夕ぐれ

朝とく

月の下の森より立ちてほつほつと鴉は谷の空へ上るも

外宮にて

ふむ砂の立つる響に驚かず雞は尾を曳くゆらゆららに

鳥羽にて

入海の波にうつろふ星明り向の岩のはつはつに見ゆ

日和山にて

ここにしてわが見るところいくばくぞ波はつ
らなりつらなり煙る

木の間より見えて螢の消えしよりみ山の闇は
いよよ深しも

峰越に月やさしくるほのかにも木木のひま見
ゆ段の石見ゆ

待つこと一時間餘に啼かず下りて旅舍近くに來れば啼き初む

晝見つる彼の大岩の容かそも今し鳥啼く清き月夜を

三たび啼く鳥の終の長き聲僧とし聞けば僧とし聞ゆ

漂ひてわが魂の行くごとしみ空の鳥の聲のまにまに

聲止みて月ばかりなる夜となれば人等はじめて物言ひにけり

夜に更けてまた啼く

山の鳥またも啼くよと呼ぶ聲に輕くはねたる
麻蚊帳の裾

深き夜の月の清さに堪へざらむ山の鳥啼くう
ちつづき啼く

古[illegible]つつ

湧きおこる煙の中に躍りあがり甲斐の馬軍の
衝き來て早き

銃の火の飛ぶかと見れば柵の前に波と崩るる
甲斐の健夫ら

惜無の鎧の前に歯がみして今し立つらむ若き

勝頼

月光

英国の宝冠珠に盛なり

月の澄むさまに重なり重なりて廻るともなき
蹄の輪かな

當時淀川にかけられた長柄橋は甚だ長くして成る一首[illegible]

渡り來て中洲の上にかかる時いささか安し古き長橋

生駒山頂にて

大阪の灯影は見えずなりにけり河内國原夜霧立つらし

迫り寄る霧につぎつぎうるみゆく夜(よ)の高山の
上のともしび

萬歲のかけあひごともうすじめる霧立つ山の
ともしびの前

嚴島にて

夕かけてふむ廻廊のあたたかみ昔の埃のたまりしるしも

濃き影をもちてなみ伏す群山の上をわたりて
陽は傾くも

傾きていよよあかるき陽に背き藍色ふかき山
の半面

[illegible]にて

木瀬川の暑さに堪へてもとめ聞く眞夏の原に
歌ふ鶯

あしたより淺間の煙搖れもせで眞陽てる空は
仰ぐに堪へず

題畫

畫中の人物は皆王朝のそれなり荻生天泉君の描くところ舊事を詠む

女性[illegible]して題せり

くれなゐの濃染の梅に朝日さし目端あかるき

春となりぬる

男琵琶を抱けり

隠れゐる月をも招く撥はあれど昔にかへす音こそひびかね

男琴を置きて[illegible]より

外面には月の夜露や繁からむ寒くも蟲の音こそなりぬれ

女子に立ちて童に若菜を摘ます

はるばると野邊の霞にひかれ來て摘めど若菜
の數ぞすくなき

女旅裝して二人行く

稲荷山杉のしるしをたのみつついく度のぼる
坂路なるらむ

濁川

瀬戸の町にて

光なき波をいささか立たせつつ白濁り川泥の
ひまゆく

群にうごく工場の煙よどみあひて夜よるとなりたる川添の路

岩谷莫哀君、七回忌に

呼ばば谷答へすらむかすでに君うるさしといひて答へざらむか

那須にて

山風に流るる霧にまぎれつつ雑木の紅葉散りつづくかな

黄に閉むまばら林のなかにして白く煙らふ隣宿の暁

鹽原にて

向ひ立つ岨のつめたさ大瀧のしぶきは霧とまじり流らふ

釣橋の下のもみぢ葉おこりくる眩暈（めまひ）を堪へてわが見おろすも

勤續多年の賞状をうくる日

いたづらに積みつる年をおもふより今日のわが日のやりどころなき

東海道を行きつつ

つぶら實を日に照らさせて大富士の前に枝張る一本の柿

葉をしげみくらく重たき枝の間に照りて蜜柑の實のつらなれる

德川園にて

背にさす光に見つつ朝庭の露の多きにこころおどろく

除　式

岩谷莫哀君の歌碑除幕式の日多摩墓地にて

うれしとて君が聞きいふ松の風少し吹かばと
いふ日和なり

いかならむ今幕あくるいしぶみの後(うしろ)よりふと

君が出でなば

ひらかるる幕のまにまに見ゆる石思を越えて

高く嚴しき

生きてゐばわれのといふを忘れつつ君も手拍
たむほどの大石

いしぶみの廣き面(おもて)に散りぼひて文字は嬉しく
よくはまりたり

にが笑してあるらむか君が寫影られてありと
君が在りなば

[illegible]

つぎつぎの人のことばを石の文字見つつし聞
けば君ある如し

遠ざかりのみゆく君を今日によりて嬉しく近く呼びかへしつる

昭和十年

なにがしの宮家にて

きららけき朝の御居間(おんゐま)たまはれる御祝酒飲み
かねにつつ

百花の圖に

人のため神のつくれる國なればゑらぎあひつ
つ住むべかりけり

安田青風君に

三日潮播磨冬野に父をわが焼きしが如く君も
焼くらむ

今年より播磨冬野のさびしさを確に知りて君
はあるらむ

[illegible]

過のかくも出でむと思はむや痛くも人を咎め来にけり

伊東より今井の濱に車を馳す

いかにわが来にけむ道ぞ天城のや矢筈岩山ねぢれて見ゆる

温泉に急ぐ車の中に妻と居て物こそいはね樂しきもいを

武者押

鎧武者下りたつ闇の廣庭にあまた松明今燃えそめつ

松明の炎散らしてとうとうと太鼓ぞひびく列
ならむとす

法螺の聲響きわたればゆらぎつつ松明の火ぞ
立ち分れたる

松明はうへに八幡大菩薩と書いた旗は浮き出でて見ゆ

鹿の角牛刀御幣龍頭かぶとのむれに火の粉は散るも

革綾緋糸紅白綾むらがるうへの軍神のはた

弓高くとれるは主将大将の金小札こそ間にきらめけ

直垂の下ら肅肅と立ち行けば指物ゆらぎ武者
今し出づ

霜解のやはら泥路ふむまゝに夜(よ)の武者草鞋音
なかりけり

燃えさかり眞闇をすすむ火の下にさつさつと
起る草摺の音

途中にてまた見る

一陣の先頭すでに近づくか二列松明闇裂き來
たる

草摺の觸れ合ふひびきははたはたと一歩六足

武者近づくも

松明のあかき頭のうへにうごく八萬九千軍神

一旗

負征矢のそよと鳴る音武者草鞋ふみしむる音
に交じりて聞こゆ

唐のかしらは白毛の冑なり

誰れが子ぞ光にゆらぐ犛牛の毛唐のかしらを
猪首に著るは

立烏帽子著たる女の貝吹けばいささか夜の闇
ぞなごめく

赤絨黒絲絨白絨くらくあかるく火のまへ行
くも

しばらくは光を過ぎり白羽の矢見る見る闇の
深きに紛る

車掌は露西亞人なり

口疾くも云ふはわかねど寄り來れば切符さし
出す車掌の前に

雨あとの大野の大氣澄みたれや高粱畑の末も
霞まぬ

車中の席は上下二段上段の人は席と天井との間狭きがため寝るより外に法なし

入ればすぐ席にあまりて寝る人の靴のうら動く頭の上に

緩やかに車わたれば鐵橋の桁の赤錆あきらかに見ゆ

大洗にて

二人してゆふべの砂につけて來しあとの著き
をふりかへり見る

水戸公園にて

降らむとし僅かに保つ空の下に咲き滿つ梅の
色はさびしも

春雪

吉野梅林にて

解けながらはつかに積る泡雪に林の梅の花寒げなる

傘さして林に入れば雪ながら梅の花落つ濕土の上に

梅しろき林を透しひびく鐘雪に傘して人つくが見ゆ

沧雪に降らえる梅の花見ると崖ちかく立つ人と離れて

山近き梅の林の人なきに音して雪の降り入り止まず

聞くべきを遂に聞きえず別れねばならぬ人とし君なりにけり

なすべきを皆なしたりと萩の家の大人の御前に君申すらむ

春雨

沼津のあたりにて

降る雨に色しづまりて桃林富士見ぬ朝を咲き
足らひたる

雨靄に末はまじりて桃林薄くれなゐの空におよべる

明石の人丸神社境内にわが書ける「天さかる」の歌碑成れりその除幕式に臨みて

幕落ちて見えくる文字のたしかさに心いささか安んじて居る

つくづくと向ひてあれば拙さの見え加はりて
　悲しきわが文字

碑に向ひて面上げがたし今日の春日のよく照
　らすこと

いにしへの大歌人の大き歌なほ筆太に書くべかりけり

萬葉假名は讀過し難しとて草假名にて書けり

まだ知らぬ文字(もじ)に書かれてわが歌と思はずやあらむいにしへ人は

明石大會席上にて

喜の心にきよくしみて來る春の海邊の朝の冷(ひえ)かも

津山市なる鶴山城址に櫻を野村河畔氏とともに見る

細き枝に花をあつめて立ち群るる櫻が上の夕あかね雲

松たかき大城の櫻今日もまた風なきままに咲き保ちつつ

[illegible]人と知られず

うしろでになりて知られし師のみかげ追ひ行く時をふと失ひぬ

うなづきてよく聞きませば師の前に弟子てふことを忘れし日あり

弟子われに若きほこりにほこらせて笑みていまししあはれ先生

白虎隊の墓にて

これまでと一途におもひ切りつらむ若きが故に人は尊き

[illegible]

上りあぐみ呼吸ととのふとたたずめば山の百合見む心もあらず

夏しるき日の照り強み仰ぎみる巖(いはほ)の縞の白くつづける

[illegible]

鳴き出づる彼れや郭公からごゑの老聲にして力をもてる

若杉の林にこもるくくみ聲かつこうかつこう
郭公なくも

鳥の叙に心ひかれていつ知らず佛語らふ群を
離れつ

山の陽は夏にして猶暑からず照らされて聞く
郭公の聲

木のもとのわれらが聲を聞くらむを猶妻戀に
啼きつぐ郭公

風立てば若葉の梢ゆれ強み鳴き移りゆく郭公のこゑ

牡丹散りて緑艶なき葉の垂るる坪にさす陽は
汗を促かす

吉野にて

啼きかへる鳥の群を目の下に夕食の箸を取り
ながら見る

青澄みて星なき空の峯近う匂ひそむるは月代かそも

月代の匂くははる向つ尾の杉の穂立は黒く際やか

影はやもさすといふなり月出づる山に眞向ふ
隣室の人

ほのぐらき檻干にして仰ぐ山青根と云ふを月
出でむとす

山の端の空は眞青に澄み切りて月に近づくもの一つなし

流るるは夜半のさ霧か月光が白くけぶらふ谷の宿は

人の死に

ふりかへり見だにもせねばここにわがおとす

涙を君しらざらむ

夏の旅

名古屋にて

夢さめて汗しとどなる胸の上にのしかかり来る夜中の暑さ

岡崎なる大樹寺にて爲恭の畫ける襖を見る

立て切れる大和繪襖つばらかに見つつし居れば汗眼に入るも

爲恭もかかる顔してゐたりけむ繪の人らみな下ぶくれなる

八幡のほとりにて

すがれつつ猶咲きつづき杜若深める夏ににほへるさびしさ

小山にて思川を渡りつつ

更くる夜の古城の天守星空の大きくぎれに我認めたり

牛窓にて

眞夏陽の照りし盛れば島の磯岩の裂目の深く
し見ゆる

玉島にて良寛堂を見る

蒸暑きこの夕和を世にうとき人もその日はさ
こそわびけめ

生駒山の半腹に宿りて

今朝もまた谷二谷を埋めつつ雲は波立つわが
足もとに

この峯の今朝は見えぬを語るらむ雲の谷間の
電車の子らは

雲の散る谷間谷間に見え來るや田畑家寺人道電車

雨けぶる山のしづけさ雷のとどろくなかに鶯啼くも

奈良は今夕日さすらし若草の山を根にして大き虹たつ

長良川の邊を諸友と行く月對岸の金華山の上にあり

影及ぶ川添道を語り行きをりをりにして月を仰ぎつ

かげくらき山の上にして月今し澄まむ限を澄まむとすなり

[illegible]

篝火の亂れこぼるる瀬にくぐり競ふ荒鵜の頸透きとほる

うち競ひたぎつ早瀬に鵜の入れば散る火散る
波川うち亂す

美幌屈斜路

北見の國美幌より車を驅りて美幌峠に上る屈斜路湖はこの直下にある大湖なり時に霧甚だ深し風をりをり起る辛うじてその全貌を見る

赤土のみちに車を乗り捨てていのぼる峠の草の露はも

湧きかへるさ霧の海を山の冷え車の酔を拂へ
つつ見るも

霧の中に霧吹き立つる風ありて露たもつ草の
ふるへは寒し

山の霧凝りてつくれる朝露の草生の冷は靴に透るも

北國の果にしありと思へかも霧吹く風の心を打つも

霧ややに亂るとすれば日の下に思ひもかけず
見え來し小島

飛び狂ふ霧のひまよりふと見ゆる小島を閉む
水の靜もり

さ霧吹く風を強みか湖の面片面よりして明るみ來る

霧動くままに隱され現はされ遂に殘らず見え來し湖

人もなき山の上にして湛ふ湖の深き静けさの

恐しさかも

[illegible]
棲むといふ湖中の島近く見ゆ

乱るるは湖の朝霧あさ風の大虎杖の葉を鳴ら

すまま

薄黒き霧のなかよりあらはれて匂妖さし荒草
のはな

枝と枝伸びむと競ひ原始より木と木戰ふ林の
くらさ

音のよく走る車の窓摩るは丈(たけ)にあまれる荒草のすゑ

光なく連なる波に洗はれて熊の水飲む磯はくろしも

[illegible]透明なり

底ひより湧き出づる湯のつくろ縞ひたせる肌に影す細かく

硫黄山

音たかく煙吐きつつ連なるや底黄ばみたる白ききりぎし

いがらほく咽喉をさし来るこや硫氣かかる山
にも人働ける

立ちこむる硫氣の中は鳥もすまずただ人のみ
が働くかなしさ

血を吐きて猶働くとあな無慘煙の中に硫黄採
る子ら

原始林

北海道の弟子屈より阿寒に到る原始林はことに密生せりいはゆる横断道路一條僅にこの間を通せり

さるをがせかかる枝のみ白うして闇さはてなき林を行くも

奥ぶかう物にあたりてかへるかも林突き切る
車の響

木木のみな生きむ死なじの爭ひに原始よりか
も陽のなき林

爭はであらねば遂に生き得ざる木の悲しみを

ここにして見つ

聳立てばいかにかあるらむ原始より力の限り

戰ふ木と木

死なじとし枝をからませ葉を合はせ風と光と
木木は忘れつ

死にて猶仆れふすべき地をも得ず自枯れて立
つ老木はあはれ

生きむとし戰ふ木木のひまくぐり吐息の如く
霧湧ききたる

子に急ぐ熊のみならむからみあひ解けぬ木と
木の中行くものは

乏しかる光に笑みてなほ匂ふくらき木かげの
荒草の花

藍深き水を見せつつ霧は散るさびたい花の白き崕より

さ霧散る渕見おろすとき花白きさびたの幹を握りしめたり

底くらく湛ふ水の面に波もなしこの淋しさは
魚も堪へじな

棲むものもなしと人云ふ淋しさに思はず湖を
背にしたりけり

雌阿寒いつよき斜面を風行くか霧のたえまの

木木目にうつる

眞黒なる斜面を見せて雌阿寒の霧散らす風の

音ともに來たる

浚す手の俄に寄し島の岸波に誘はれ湯の湧さ
来らし

登別

北國は芽も荒し葉より葉に强き音立て土にし
落つる

風に乘りて霧馳せ去れば山の雨あらき縞なし
しぶきて來たる

大き木の下に腰する老あいぬ物彫る見れば雫
止むらし

夫(つま)が彫る熊を買へといふらしきあいぬの女笑まはしかも

焼山の斜面(なぞへ)待立つ下にして泥湯沸くかさ音立てながら

生物(いきもの)の生命(いのち)貪るもののごと捲き立つ渦は目を
當てがたし

ふみ込まむ危さにして我行くや泥湯湧き上り
煮え立つ岸を

此の一卷に收めたのは昭和五年九月以後から昭和十年末までの作品であるが發表は十一年に及んだのもあるが製作は猶十年にかかるのであるからそれをもこゝに入れて置いた「素月」と題したのは月に心が惹かれたからであるしかし私の意にかなつた歌がそれに關したものであるといふのではない

編み終へていつもながらつくづく私の歌が私の意にかなはないのを歎く私の思想は感情は感覺は猶高く深く強い積であるしかし現はれたところは低く淺い且弱い私のものか

人からみれば殆ど憐むほどであること、これは思ひと語とが伴行しない[illegible]
いであらう。[illegible]
安易な心は他よりも心満足は力を失はしめる不安と不満
足によつて人は奮ひ、起つ。私の精は或は私の幸福の鍵であらう
う私はこれを完全に癒すべく力のかぎり勉め續けよう

昭和十一年三月　　　　著　者

昭和十一年三月卅日印刷
昭和十一年四月三日發行
昭和十一年九月一日再版發行

素月集

定價金貳圓五拾錢

著作者　尾上柴舟

東京市麴町區富士見町二ノ八
發行者　長坂金雄

東京市牛込區山吹町一九八
印刷者　萩原芳雄

東京市牛込區山吹町一九八
印刷所　萩原印刷所

發行所
東京市麴町區富士見町
振替東京一六八五番
雄山閣